

軌跡

あの頃の
広見町
日吉村

受け継がれる旧習

今月号に掲載した「子泣かし天狗祭」と「新春囲碁将棋大会」。どちらも、長い間地域の方々に支えられ、受け継がれ現在に至っている。

20年前に掲載された子泣かし天狗祭の記事には、太鼓集団「魁」の、「この催しを毎年続け独自の郷土芸能に育てる計画」と熱い思いが記されている。

ひろみ

幸せと健康を祈願

子泣かし天狗まつり開く

昨年十一月にデビューした太鼓集団「魁」(平山久則リーダー、二十一人)のメンバーが一月六日、広見勤労青少年体育センターで、自分たちで考案したイベント「子泣かし天狗まつり」を開催しました。このイベントは「魁」誕生を記念した活動の一環として計画したもので、広見町で生

まれた子供たちのために「鬼ヶ城に住む天狗が年に一度里に下りてきて、神通力で子供たちの幸せと健康を祈願する」という内容。



鬼ヶ城から下りてきた天狗が子供たちの幸せと健康を祈願した第1回「子泣かし天狗まつり」

今回祈願の対象としたのは、昭和六十四年一月一日から平成元年十二月三十一日まで生まれた一、二歳児百人以上で、まわり当日は雪模様肌寒い天気となったため約半数の幼児たちが父母に抱かれて参加しました。



同団体は、この催しを毎年続け、広見町独自の郷土芸能に育てる計画です。

↑ 広報ひろみ'91年2月号
平成3年2月1日発行

← 広報ひよし'77年2月号
昭和52年2月1日発行

44年の歴史がある、この「新春囲碁将棋大会」で使用している碁盤の一つに、地域の住民から提供されている碁盤がある。それは、カヤの木で造られた貴重なもので、亡くなられた西村吉甫さん(日向谷)の私物であった。吉甫さんが亡くなられて、ご家族の「囲碁が好きだった故人のためにも使ってもらいたい」との思いで、貸していただいているそうだ。

40人が「名人戦」競う

新春囲碁将棋大会で

神妙な手つきでパチン、パチン終日、熱戦譜を繰りひろげました。一月九日恒例「新春囲碁将棋大会」が開かれ、村内から脱自慢「棋士」約四十人が参加して名人戦を展開しました。

この大会は、日吉村公民館と下鍵山分館が共催で開催しているもの。関下鍵山分館長が「人間は、頭を使っていないとダメです。囲碁、将棋は年令の差がなくいつまでも楽しめます。刀一ぱい頭張って下さい」とあいさつがあった後、さっそく盤面とニラメッコ。

日頃から顔なじみの友もきょうは敵。囲碁、将棋は、意地の張りあい、ともいわれ、手癖もなかなか盛ん。会場のあちこちで、盤面の形勢悪く、窮地におちいっているほうからは「アイタワー、そうか」など嘆息もある。また、「名人長考」のごく「ウーン」とうなったり、深く頭を垂れ、じっと考え込む姿も見られるなど二十代から七十代の老若が、楽しく和気あいの雰囲気の中で

「ウーン。この大石を殺してなるものか」終日、熱戦譜を展開

大会を終りました。成績は次のとおり。
▽囲碁の部①渡辺進(4勝)②渡辺清(4勝)③山本浩市(3勝1敗)
▽将棋の部①山口敦幸(5勝)②清水久(8勝3敗)③藤本和宏(7勝3敗)

鬼北の里から こんにちは！ No.12

杉山 浩章さん ご家族
書 恵未さん
子 陽美葵さん
子 奏太さん



引っ越して半年が経ちました。子どもをのびのびと育てられる環境に家を建てることができ、よろこんでいます。これからもどうぞよろしくお願ひします。